



ささへるニュース

Vol.7

2015年 春

だれもが輝く明日へ



Sasakawa Memorial
Health Foundation
笹川記念保健協力財団



特集

「ハンセン病問題の今後を考える」

リトリート、講演会開催報告

開催報告 第14回 日本財団ホスピスナース研修会
「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

2015年度放射線災害医療サマーセミナー開催日程のお知らせ／2014年度マダガスカル医療支援報告会開催
年度末にあたり理事長からご挨拶申し上げます

「ハンセン病問題の今後を考える」

「グローバルアピール (2015) ～ハンセン病に対するスティグマと差別をなくすために～」が第10回目を迎え東京から発信されたのを機に、その協賛イベントとして、日本各地で企画されたハンセン病に関するイベントへの助成と、ハンセン病問題の今後を考えるリトリート (合宿型の話し合い)、3都市での講演会を開催しました。

グローバルアピール2015と両陛下謁見

日本財団は回復者、宗教者、企業、教育機関などの賛同を得て、2006年より毎年「グローバルアピール～ハンセン病に対するスティグマと差別をなくすために～」を発信しています。10回目にあたる今年は、初めて日本からの発信となりました。国際看護師協会の賛同を得たグローバルアピール2015は、1月27日に国内外から多くの参加者を得て盛大に発信されました。

翌日には、本式典に参加した日本と海外のハンセン病回復者8名が、天皇皇后両陛下の謁見を許されました。「故郷では家族さえも私に触れることを避けたのに、両陛下から親しく話を聞かれ手を握っていただき、感無量です」と感動を口にしていました。

御殿場リトリート (GOTEMBA RETREAT 2015)

グローバルアピールや両陛下謁見に続き、ブラジル、インド、インドネシアなどのハンセン病回復者を中心とした、11カ国25名と共に、ハンセン病問題の現在と今後を考える会を開催しました。世界の多くの国では、ハンセン病患者数は減少している一方で、今なお新たな患者が発見されてい

る高蔓延地域があります。患者数の減少にともない、国レベルでのハンセン病対策の優先順位が下がる中で、ハンセン病サービスとその質の維持が今ほど問われている時代はありません。11カ国の参加者と共に2泊3日をかけて、2つのテーマについて話し合いました。

1つは、ハンセン病回復者自身による、ハンセン病サービスへの積極的な参加について。ハンセン病サービスとその質を維持するために、回復者自身が「自分たちの」サービスに声を上げ、行動を起こし始めています。この動きを進めるために必要なのは何かを協議しました。

もう1つは、ハンセン病問題に取り組む新しい「当事者」(担い手) について。日本をはじめとする多くの国では、厳しい差別や隔離の時代を生き抜いた回復者は高齢となり、活動も難しくなってきました。その回復者と共にあり、その声を代弁し、語り継ぎながら、ハンセン病問題に正面から向かい合い、自分の問題として取り組む人たちが現れています。今後は病気を体験した回復者に加え、ハンセン病問題を自分の問題として取り組む人たちも含む「当事者」を増やしていこう、と話し合われました。

2つの大きなテーマを語る刺激に満ちた2泊3日は、参加者によるさらなるコミットメントと共に幕を閉じました。

参加団体：ハンセン病回復者社会統合運動 MORHAN (ブラジル)、ハンセン病回復者協会 PerMaTa (インドネシア)、ハンセン病回復者協会 APAL (インド)、ハンセン病協会連盟 KFHA (韓国)、ハンセン病活動家連合 CLAP (フィリピン)、全国ハンセン病回復者協会 ENAPAL (エチオピア)、Care & Share Circle (マレーシア)、Joy in Action (中国)、保健省疾病対策局 (タイ)、IDEA USA (アメリカ)、駿河療養所自治会 (日本)、ハンセン病市民学会 (日本) 他



会議の様子 (於：静岡県御殿場市)



富士山のふもとでの集合写真

リトリート、講演会開催報告



鹿児島講演会場の様子
(於：鹿児島県鹿屋市)

「ハンセン病問題を語り継ぐもの」講演会

当財団はグローバルアピール2015を大きな国内啓発の機会とすべく、ハンセン病啓発企画を公募し、協賛イベントとして助成しました。同時に、新たなハンセン病問題の「当事者」(担い手)が現れつつあるマレーシア、中国、日本の3カ国の語り手による講演会を、大阪では追手門学院大学社会学部共催、鹿児島では星塚敬愛園自治会共催、国立療養所星塚敬愛園後援、東京では日本財団学生ボランティアセンター後援で開催しました。

中国には今なお600を超えるハンセン病回復村があります。そこには、家族や外の社会との交流を断られた、高齢の障がいを持つ回復者が暮らしています。かつて「死ぬのを待つだけ」と言っていた村人が、希望を取り戻したのは、学生の力でした。村人と学生は、支援する者とされる者という関係を軽々と越え、強い絆で結ばれています。中国からは、学生という新しい「当事者」を、回復者の視点から欧鏡釗さんが、ワークキャンプのコーディネーションNGOのJIAから菅野真子さんが語り手として話をしてくれました。マレーシアのクアラルンプール近郊にある、かつて世界で2番目に大きかったスングエイブロー療養所の入所者は子どもを産むことは許されていましたが、育てることは許されませんでした。所内の乳児施設で育てられた子どもの多くは、国内外に養子に出されました。高齢化が進

む入所者は、最後に一目でいいから我が子を目にしたいと切望しています。数十年と言う時が過ぎた現在、入所者の子どもを探すのは非常な困難を伴いますが、見つかった第2世代の中には、ハンセン病を理由に親に会うことを拒む人も少なくありません。その中で今、語り部として活動を始めた第2世代がいます。マレーシアからは、入所者と第2世代をつなぐ取り組みを続けるエニー・タンさんと、第2世代として語り部活動を行うノラエニ・モハメドさん、そしてノラエニ・モハメドさんの娘で日本に留学中のナジーラ・バスリさんが話をしてくれました。大阪では中国とマレーシアの話に加え、長島愛生園歴史館の学芸員である田村朋久さん、鹿児島では星塚敬愛園入所者の小牧義美さんと上野正子さん、東京では弁護士の山本晋平先生にお話をいただきました。ハンセン病問題は歴史として残すだけ、また、知識として知るだけでは十分ではありません。そこから得られた普遍的な問題提起を、どのように現在、未来に活かしていくか、ということが重要であり、そのことを考える機会となりました。

開催にあたり、追手門学院大学、国立療養所星塚敬愛園には多大な協力をいただき、予想を超える多くの参加者を得ての講演会となりました。「ハンセン病に関する講演会にこれだけの人々が参加する日本は、意識が高い」と、語り手も強い印象を持って帰国しました。



星塚敬愛園・社会交流会館(2015年開設)の前で

※表紙写真：後列左より菅野真子氏(Joy in Action)、欧鏡釗氏(広東省清遠市新橋村)、ナジーラ・バスリ氏(第3世代)、岩川洋一郎氏(星塚敬愛園自治会)、エニー・タン氏(スングエイブロー療養所入所者評議会)、前列左より、ノラエニ・モハメド(第2世代)、上野正子氏(星塚敬愛園自治会)、小牧義美氏(星塚敬愛園自治会)



大阪講演会でお世話になった蘭由貴子先生とともに

(左からエニー・タン氏、ノラエニ・モハメド氏、蘭由貴子氏(追手門学院大学社会学部教授))
(於：大阪府茨木市)

第14回 日本財団ホスピスナーズ研修会



全国から約150名の看護師が集い、講演、グループワークを通して各地域、現場の経験を分かち合い、自分の考えを的確に表現し伝達するトレーニングを行いました。

- 日程** 2014年3月5日(木)～6日(金)
- テーマ** 「聴く・語る 看護の力を見直そう」
- 場所** 日本財団ビル

講演1

「苦しみに寄り添うって?向き合うって?」 ～話して、離して、放す～

講師 佐藤泰子(京都大学大学院 人間・環境学研究所 研究員 (学術研究奨励))

「人はなぜ苦しむのか。語ることの意味」について、「苦しみと緩和のプロセス」を用いて説明いただきました。苦しい事柄があるとき、人は自分自身に「NO」を突き付けています。苦しい事柄が動かなければ、苦しみは緩和しません。その人自身で、苦しい事情の意味や認識の変更をしたとき、苦しみを放すことが

できます。一つ一つ言葉を紡ぎながら人に語ることで、新しく織り直された意味や認識が広がります。これには聞き手の存在が必要です。真実は1つですが、事実人は人の数だけあります。語り手と聞き手は、互いの思いを100%理解することはできませんが、その間に深い淵があるからこそ、



講師 佐藤泰子先生

人は語る事ができるのです。私も間違いなく、人生のゴールテープはひとりで切らなければなりません。それまでは苦しみをわかってくれる看護師が寄り添い伴走をしてほしいと思います。(文：プログラム委員 土岐市立総合病院 中島愛)

グループワーク

聴くこと・語ることの意味を考え、「看護師だからこそできていること」に焦点を当て、5～6人のグループに分かれ話し合いました。病棟、チーム、在宅等異なるフィールドで活躍する看護師が意見交換を通して、互いの思いや考え方を知り、悩みの共有・課題の確認をしました。代表者による全体発表では「看護師は患者のやりきれない思いや怒りにあたられる

こともあるが、それは一番近い存在だからこそ信頼されているのではないか」、「多職種間の橋渡し役となれる存在であることを再確認した」という意見や、「患者と家族のバランスがとれて初めて安心して結び付く」安心の環境をつくるのが大切であるなどの意見が発表されました。



グループワークの様子

参加者の声

- ディスカッションで視野が広がり自分の課題や専門職として何が大切かを整理することができた。
- 病棟、在宅と異なるフィールドの方と互いの看護の力について確認することができ、とても有意義だった。

講演2

「対話を通して寄り添うケアリング・パートナーシップ」 ～M.ニューマン理論に導かれた看護実践～

講師 遠藤恵美子 (武蔵野大学 看護学部 特任教授)

看護師は病気ではなく病気を含めた経験の全体を捉えること、患者と家族と看護師は分割できないパートナーであり相互に浸透し合うこと、看護は患者と家族と看護師が相互浸透する中で生まれ変化していくプロセスが大事であることを事例を用いて説明くださいました。

理論というと難しく感じてしまいましたが、看護師は理論に導かれた実践が大切であり「目的」的に介

入し変化を生み出すことが大切だと教えてくださいました。「病気があっても死に直面していても健康のプロセスであり、患者家族は大きな揺らぎを乗り越えより高いレベルの成長・成熟をしていく」という言葉が非常に印象に残りました。

参加された方々は改めて「聴く」「語る」ことの意味を考え、ご自身の看護を振り返るきっかけとなったと思います。



講師 遠藤恵美子先生

(文：プログラム委員 ソフィア総合ナースステーション城南 小川綾乃)

活動助成報告会

地域啓発活動・ホスピスナース支部活動支援の今年度助成を受けた11名がポスター及び口頭発表を行いました。大学を拠点とした医療者対象のACP(アドバンス ケアプランニング)研究会や、地方総合病院における医療者、地域住民向け緩和ケア啓発活動、そして訪問看護ステーション中心に、訪問エリア内の住民を対象とした啓発活動等の発表があり、会場と活発な意見交換を行いました。

今後の開催について

日本財団ホスピスナースネットワークは、ネットワークの更なる活性化を図るため、登録対象を拡大することになりました。今後もさまざまな場で活躍する会員支援の一環として、会員のみなさまより寄せられた意見を参考に2015年度のプログラム委員で企画、実施します。

地域住民対象の緩和ケア啓発活動(活動②)

第1回JAフェア 来場者:1400名
「JAが繋がる食と農と健康の祭典」

深川農業協同組合
JA長門大津農業協同組合
長門総合病院

がんブースの設置

- ・乳がんモデル体験
- ・ケア帽の展示
- ・タバコと肺がん(スバイロ検査)
- ・肥満とがん(体組成計)
- ・DVDの上映(子ども向け)
- ・相談コーナー
- ・パネル展示

平成26年10月18日(土)実施

地域啓発活動助成成果物(助成者 長門総合病院 宮本晴美)



2014年度プログラム委員

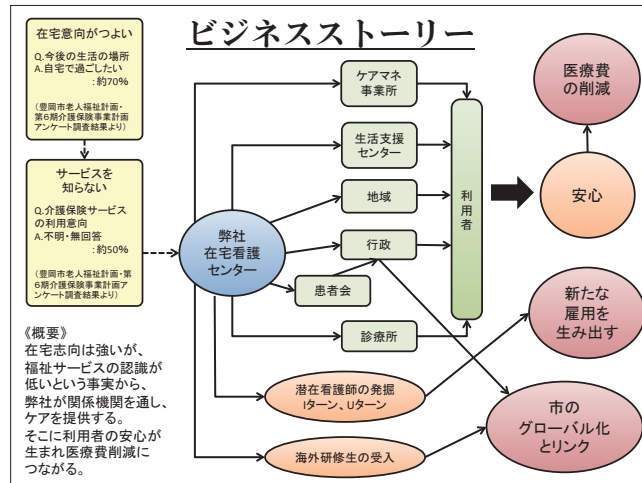
左から富山淳江さん、久野美雪さん、中島愛さん、小川綾乃さん、古川典子さん、川崎幸栄子さん

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業

超高齢化が著しい日本社会における保健・医療のニーズに応え、多様な保健専門家との連携をうながすために、中心となる看護師の養成を目的とする本事業は、2014年6月に開講しました。1期生17名は、本研修の集大成ともいえる事業計画の発表を経て、全員が晴れて修了式を迎えました。財団では引き続き、さまざまなかたちで1期生の起業・運営をサポートします。

起業計画発表

6月に始まる講義・実習に加え、計画立案にあたり、財務や管理・運営の専門家による個別指導を受け作成した17名17通りの「日本財団在宅看護センター」起業計画はそれぞれの地域の特徴・状況を分析し、必要かつ提供可能な保健サービスを中心に数年後まで見据えた収支計画を盛り込みました。



修了生 大槻恭子さんによる事業計画書より

修了式

1月29日の修了式では、日本財団笹川陽平会長から修了証を受け、ユーモア交りの式辞を拝聴しました。指導者は孤独に耐えなければならない。一人になって多面的に物事を考えて分析してほしい。そして、禅僧である一休宗純(一休さん)の逸話になぞらえ、「何とかなる」という



修了証授与



祝辞に聞き入る修了者

お言葉と、今後の支援協力についてお話いただきました。

修了生代表からは、「2025年問題の解決は最重要事項です。私たちは、この8か月の学びによって強化した看護力を発揮し、地域にしごとと定着し、発展します。史上最速の高齢社会を迎えた日本において、世界のモデルケースになる『看護師が社会を変える』取り組みを、誠実に確実にいきます。」と力強い謝辞が述べられました。出席者には、本研修の集大成である起業計画がまとめられたサマリー集が配布されま

した。修了生は、共に励まし支え合い、絆を育んだ同志との別れを惜しみながらも、起業家らしく凜とした面持ちで巣立っていきました。今後は起業に向けて、それぞれの地元での活動が本格始動します。

開業情報

2015年春、第1号となる「日本財団在宅看護センター横浜」が横浜の上大岡駅前にオープンします。以降、第一期生による本センターが続々と開業予定です。第二期生の応募は、現在受付中です。



笹川会長と記念撮影

放射線災害医療サマーセミナー

2014年8月、福島県立医科大学、長崎大学、当財団の3者による第1回放射線災害医療サマーセミナーを福島県で開催しました。本セミナーは、放射能についての知識を習得し、自然災害発生時に併発する特殊災害への対応を理解することを目的とし、米国1名を含む北海道から九州まで全国22名の医学部・看護学部他の学生が参加しました。

セミナー実施内容

前半3日間は、災害医療・放射線・福島の現状などの講義・実習を行い、後半3日間は被災地でのよろず健康相談、川内村保健活動・復興支援での意見交換、津波被災地とJビレッジ、東京電力第二原子力発電所見学を行いました。

～受講者の声～

受講者からは「大学の講義では学べない知識を習得できた。」「講義や実習、フィールド訪問を通じて、学ぶこと以外に全国の学生と意見交換できて良かった。このような機会は滅多にないと思う。」「前半座学をし、そこで学んだことを実習で活かすことができ良かった。」「放射



東電第二原発見学の様子

線災害医療について、さまざまな観点から総合的に学べて良かった。」などの感想が寄せられています。



2014年度セミナーの受講者

2015年度の予定と受講者の募集

講義とフィールド訪問の7日間コースを企画しています。4月下旬より財団ホームページで受講者の募集を行います。

- 日程** 2015年8月17日(月)～8月23日(日)
- 場所** 福島県内(フィールドを含む)
- 興味のある方は財団事務局までメールでお問い合わせください。
- メールアドレス** smhf_publichealth@tnfb.jp

2014年度マダガスカル医療支援報告会開催

公衆衛生向上を目的に、マダガスカル共和国における子どもの口唇口蓋裂治療のため、日本から医療チームを現地へ派遣。本活動の支援者を対象に今年度の報告会を開催しました。

日時 2015年1月23日(金)

場所 日本財団ビル8F

～笑顔を取り戻してほしい～

2014年11月8日～22日まで、学校法人昭和大学の医療チームが現地活動を実施しました。アンチラベ市のクリニックアベマリア病院には日本人シスターが勤務、滞在中、子どもを中心に24名の手術が行われました。報告会は本事業主体の学校法人昭和大学 小口勝司理事長の挨拶から始ま

り、形成外科医、麻酔科医、看護師、参加学生代表の4名が日本の医療現場とは異なる不便な環境下での医療活動について、チームの役割、患者さんとその家族への想い、物がない中での工夫等について印象的な言葉を残されました。

現地では口コミが広まり遠方からも受診に来ています。支援者の方のお陰で手術はすべて「無料」、傷跡も目立たず術後の回復も良好だそうです。今回ギャラリーとして現地活動に同行

の本事業発起人 曾野綾子先生、映画監督 山本晋也氏も出席、和やかな雰囲気の中に報告会は終了しました。



山本晋也監督 現地の状況についてコメント

年度末にあたり理事長からご挨拶申し上げます

先の号から、あっという間に年が変わり、そしてあっという間もなく年度末が目の前です。

暦上、1月1日が新年であることは、世界の多くの国で共通です。が、何らかのご縁があって、年末年始を滞在した10カ国ほどでは、1月1日はお休みではありましたが、特別の休日ではありませんでした。つまり、12月31日まで、そして1月2日からも普通の勤務でした。その代わり、クリスマス、イード(イスラム圏のお盆とお正月が一緒になったような数日)、その他諸々の特別のお休みがあるところもあって、それはそれで気分一新、結構なことでした。

笹川記念保健協力財団では、昨年10月の40周年から、新年1月27日の日本財団主催の「グローバルアピール 2015 Think Now ハンセン病」までの日々は、駆け足ではなく、フルマラソンを全力疾走したような気分でした。

その日々、各スタッフは八面六臂どころか16面12臂…こんな言葉はありませんが…の大活躍でした。そして、その日々が終わったら、本当のお正月の気分になるはずでしたが、早、気分は新年度、年が変わることも、年度が変わることも、新たな挑戦に向けての気分一新の機会として、ありがたく思います。みなさん、ご苦労様でした。

弊財団をご支援ご指導いただいておりますみなさま
この間の成果をご高覧の上、忌憚ないご意見、ご叱正
をお願い致します。



理事長 喜多悦子

マンスリーサポーターを募集しています

笹川記念保健協力財団では、さまざまな事業を安定して継続していくために、マンスリーサポーターを募集しています。みなさまのご支援をお願いいたします。クレジットカードで、毎月一定額を自動的にご寄付いただくことができます。

ご寄付いただく活動分野と口数をそれぞれお選びいただけます。

ハンセン病のない世界

ホスピス緩和ケア

公衆衛生の向上

クレジットカードで、毎月一定額を
自動的にご寄付いただけます

一口1,000円/月をお好きな口数で

2014年12月からの決裁システムの変更に伴い、一口1,000円より
お好きな口数で月々の支援額をお決めいただけることになりました

*寄付金額の変更、停止はいつでも自由になれます。当財団への寄付金は、税制上の優遇措置の対象となります。

詳しくは当財団の[ホームページ](#)→[ご支援ください](#)→[マンスリーサポーター](#) (<http://www.smhf.or.jp/>) をご覧ください。

笹川記念保健協力財団では、さまざまなメディアで情報を発信しています。

- ホームページ/理事長ブログ/財団ブログ (ハンセン病対策事業/ホスピス緩和ケア事業/公衆衛生向上のための事業)
URL: <http://www.smhf.or.jp/> facebook: <https://www.facebook.com/smhftokyo>
- ニュースレター「チームささへるニュース」: 年4回発行

チームささへるニュース Vol.7 2015年春発行
発行元: 公益財団法人 笹川記念保健協力財団
発行人: 喜多悦子
編集: チームささへるNL編集委員会

チームささへる事務局 (笹川記念保健協力財団内)
〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電話: 03-6229-5377 (代表) FAX: 03-6229-5388
EMAIL: smhf@tnfb.jp URL: <http://www.smhf.or.jp/>

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION